

兵衛志殿御返事

弘安元年十一月二九日 五七歳

銭六貫文の内^{二貫次郎}よりの分、^{あつわた}白厚綿の小袖一領、四季にわたりて財を三宝に供養し給ふ。いづれもいづれも功德にならざるはなし。但し時に随ひて勝劣浅深わかれて候。うへたる人には衣をあたへたるよりも、食をあたへて候はいますこし功德まさる。こごへたる人には食をあたへて候よりも、衣は又まさる。春夏に小袖をあたえて候よりも、秋冬にあたへぬれば又功德一倍なり。これをもって一切はしりぬべし。たゞし此の事にをいては四季を論ぜず、日月をたゞさず、^銭・^米・^帷・^子・^衣・^小・^袖、日々月々にひまなし。例せば^頻・^婆・^娑・^羅・^王の教主釈尊に日々に五百輛の^送車ををくり、阿育大王の十億の沙金を^{けい}・^ず・^ま・^じ・^施にせしごとし。大小ことなれども志はかれにもすぐれたり。其上今年は子細候。ふゆと申すふゆ、いづれのふゆかさむからざる。なつと申すなつ、又いづれのなつかあつからざる。たゞし今年^波・^木・^井は余国はいかんが候らめ、このはきぬは法にすぎて^寒かんじ候。ふるきを^古き^翁などもにとひ候へば、八十・九十・一百になる者の物語り候は、すべていにしへこれほどさむき事候はず。此の^庵・^室あんじちより四方の外十丁・二十丁は人かよう事候はねばしり候はず。きん^近・^辺ぺん一丁二丁のほどは、ゆき一丈・二丈・五尺等なり。この^間うるう十月卅日^雪ゆきすこし^ふりて候ひしが、やがて^消きへ候ひぬ。この月の十一日^辰たつの時より十四日^大まで^雪下りて候ひしに、^両三日へだてゝすこし^雨ふりて、ゆき^堅かたくなる事^金剛のごとし。いまにきゆる事なし。ひるもよるもさむくつめたく候事、法にすぎて候。さけは^酒こをりて^凍石のごとし。あぶらは^油金ににたり。なべ・かまに^凍小水あれば^割こをりて^寒われ、^寒かんいよいよ^乏かさなり候へば、^乏きものうすく^乏食ともしくして、さしいづるものもなし。

坊は^半・^作はんさくにて、^風・^雪かぜゆきたまらず、^風しきものはなし。木はさしいづるものもなければ火もたかず。ふるき^垢あかづき^小・^袖なんどして候こそで一つ^小・^袖なんどきたるものは、其の身のいろ^紅・^蓮・^大・^紅・^蓮のごとし。こへはは^破・^々・^婆・^々大^地・^獄にことならず。手足^寒かんじて^切きれさけ人死ぬことかぎりなし。俗のひげをみれば^瑠・^璃やうらくを^理・^瑠かけたり、僧のはなをみれば^鈴すゞをつらぬき^下・^痢かけて候。かゝる^ふ・^し・^ぎ候はず候に、去年の十二月の卅日よりは^下・^痢らのけの候ひしが、春夏やむことなし。あき^秋すぎて十月のころ^大・^事になりて候ひしが、すこしく^{へい}・^ゆ平癒つかまつりて候へども、やゝもすれば^起をこり候に、兄弟二人のふたつの^綿小袖わた四十両をきて候が、^夏・^帷・^子・^様・^輕なつのかたびらのやうにかろく候ぞ。ましてわたうすく、たゞ

ぬの^布もの^物ばかりの^思ものをもひやらせ給へ。此の二つの^小こそ^袖でなくば今年は^凍こゝ^死へじに候ひなん。

其の上兄弟と申し、右近の尉の事と申し、食もあいついで候。人はなき時は四十人、ある時は六十人、いかに^塞せき候へども、これにある人々の^兄あにとて出来し、^{しやてい}舎弟とてさしいで、^敷しき^居ゐ候ひぬれば、かゝは^{如何}やさ^{如何}にいかにも申しへず。心には^静しづか^庵にあじちむすびて、小法師と我が身計り御経よみまいらせんとこそ存じ候に、かゝる^煩わづらわしき事候はず。又とし^年あけ候わば^逃いづくへもにげんと存じ候ぞ。かゝる^煩わづらわしき事候はず。又々申すべく候。なによりも^衛もん^門の^{さかん}大夫^殿志ととのとの御事、ち^父の御中と申し、上のをばへと申し、面にあらずば申しつくしがたし。恐々謹言。

十一月廿九日

日 蓮 花 押

兵衛志殿御返事